たかがい恵美子参議院議員と これからの 超高齢社会の話をしよう

巻頭特別企画

現政府には、内閣より27名の大臣政務官が任命されています。9月2日朝、そのメンバーで構成される政務官会議が新たな政策をとりまとめ、公表しました。公表されたのは次の3つの政策。①若者が社会でより活躍できるようにする政策、②高齢者が社会でより活躍できるよう支える政策、③民間・草の根等の力を外交に活かす政策。*

たかがい議員は、政策課題②を検討するチームの世話役を務めました。

そこで今回は、政府における実際の政策立案プロセス、次代の社会保障制度体系の構築を進める過程で看護職が果たす役割や期待について、看護学を専攻する大学院生と意見交換しました。

*①③については、12～16ページをご覧ください。

金子あやさん
聖路加国際大学大学院生

浅田祥乃さん
聖路加国際大学大学院生

たかがい恵美子
参議院議員

PHOTO：矢野信夫

政策提言も看護の仕事の一つ

たかがい　病院勤務では実感しにくいかもしれませんが、政策提言も、看護職の大事な仕事の一つです。何故なら、私たち看護職の働き方は、社会保障制度という公のルールに依拠して展開されているからです。

働きにくい、報酬が低い、技術をもっと評価してほしいなど、私たちにはたくさんの要望があります。それを実現するためには、多くの看護職が活躍する場所に共通する制度やしくみを創りかえることが必要です。

今日は、その基となる国の政策が、どのようにデザインされ、誕生しているかを一緒に見て、考えたいと思います。よろしくお願いします。

政策提言「幸齢社会への挑戦～ハッピープラチナモデルの実現～」

はじめに、私たちが発表した政策「幸齢社会への挑戦」（11ページ参照）について説明します。これは、以前よりも20年余り延伸した人生の時間を、高齢者が幸せに感じ、より豊かに過ごせる社会をめざし、ハッピープラチナモデルを実現する政策です。

高齢者各々の経験や人脈が大切にされ、高齢者がハッピーに活躍できる環境を醸成する政策の要は「幸齢期への備えを促進すること」です。具体的には、65歳以降の暮らしについて自らが考えデザインする上で参考となる情報が提供され、人生の早い段階から、関心を持つ機会が得られるよう〝ハッピープラチナ運動〟を展開したいと考えています。

敬老の日を含むシルバーウィークは、国民にとって大切な家族サービスの機会でもあり「人生をより豊かに過ごすための備えについて考える」好機です。向こう10年間をハッピープラチナ運動期間とし、団塊の世代が75歳を迎えるころには、日本社会に「人生の幸せな時間を長くする基盤」を整えたい。併せて、高齢者の「働き手として の活躍」と「社会の担い手としての活躍」の両面を支える政策体系を構想しました。

「働き手」としては、働くことが生きがいや心身の健康につながるという側面を肯定的に受け止め、男女ともに年齢に制約されない就労機会を確保する取り組みや、自営業・個人事業主としての就労機会の拡大、農作業の軽労化技術の開発など、希望に応じた就業につながる道筋をつくってまいります。

ハード面では、住宅整備と働く場づくりを融合するモデル事業の展開、心のバリアフリーも含めた総合的な環境整備、ＩＣＴ活用による安心感のある暮らしの実現などに取り組みます。

一方、ひと・まち・時代をつなぐ「社会の担い手として活躍するための政策」によって、住まいの近くに安心して利用できる施設の整備、世代間交流を促進する伝承者の養成や学校教育との連携など、高齢者の知見を活かす取り組みを実施し、地域における支え合いの体制整備と地域の文化・伝統の継承を支援します。

健康的に成熟する幸齢社会・日本の新たな挑戦に対し、国民のみなさまの高い関心と積極的な参画をいただきたいと考えています。

高齢者に焦点を当てると、いろいろな問題が見えてきた

たかがい　ところで高齢者というと、どんなイメージを持ちますか？

浅田　身体的な衰えはあるけれど、豊富な経験をもっている人。

金子　社会で活躍している人と、していない人との差が大きい…。

たかがい　そういう面もありますね。私の検討チームでも、類似の意見が多く出されました。そして議論の過程で、果たしてこの国には、年齢に拘わらず一人ひとりが自分らしく生きることのできる環境が整っているのか、と考えさせられる場面もありました。

高齢者は、これまで培ってきた人脈や経験をもっています。加齢に伴う変化やそれぞれの足りないところを補えれば、いろいろなことができるでしょう。しかし、それぞれの能力を発揮できる環境にないとすれば、お二人が言ったような高齢者の既成イメージの中で生きていくしかありません。また、現代社会においては、幼児と高校生というような、異なる世代間での日常的な交流が少ないという問題もあります。

高齢者の知識やノウハウは、社会の宝でもあると言えます。また、高齢者には、人と人をつなぐ、人とモノをつなぐ、人と地域をつなぐ、あるいは時代を継承していく担い手としての機能もあります。もちろん、実際に社会参加してもらうには、いろいろな制約が出てきます。ですから、これからは、みんな同じように働くのではなく、それぞれの長所を活かして活躍してもらえる環境をつくっていこう、という感じで議論が深まっていきました。

高齢者としての20年を幸せに過ごすには？

たかがい　公表した政策のレジュメを見て、何か気になりませんか。

金子　「高齢社会」ではなく「幸齢社会」になっています。

たかがい　そうですね。初会合では現状の課題認識を議論しましたが、その段階では「長生きしていいのだろうか」「早く死んだ方が楽ではないか」と、負の面を強調する声もありました。要介護状態、余生、世話になる立場といったイメージが強く、高齢者本人の個性や希望に照準を当てることができていない現状を痛感しました。社会の担い手・支え手・働き手という肯定的な受け止めが、不足しているようです。

平均寿命が男女とも80歳を超えている今、私たち日本人は平均して20年余りの高齢期の時間を持っています。誰だってこの20年を辛く過ごしたいとは思いません。幸せに暮らしたいと願うことでしょう。もし仮に今そうなっていないのであれば、高齢期を幸せと思える環境をつくろう。それが私たちのめざす政策です。

タイトルはメンバー全員で考え、厳正なる投票の結果「幸齢社会への挑戦～ハッピープラチナモデルの実現～」と決めました。チームの構成員各々が課題を認識し向かう方向をしっかりと共有する。このことは、その先の施策体系の構築や役割分担、全体の進捗管理のあり方などを議論していく上でとても重要です。国会議員もこうして水面下では汗をかき、地道な作業をしているのです。

働き手・社会の担い手としての高齢者へ備える

たかがい　社会経済という議論もあります。実際に国内では100歳を超えて地域の防犯活動に勤しむ方や鍼灸院を営んでいる方など、様々な〝現役〟がいます。働きたい人たちには働ける環境をつくり、社会の担い手として地域に参加できる機会を増やしていこうと考えています。

ところで、65歳は突然やってくるものでしょうか。今年45歳の方は10年後55歳となり2035年には65歳。その年代の看護職であれば多くは管理職として活躍し更年期の不調と向き合いつつ、リタイア前の過密スケジュールをこなす日々。定年を迎えても、再雇用によって就業を継続しているかもしれません。しかし、65歳から先の暮らしについて、私たちはどんな備えをしているでしょうか。目の前のことに精一杯で、退職後や65歳から先の人生について、具体的なビジョンを持ち、それに向けて準備をしているという方は、少ないように感じます。

働き手、担い手となるより以前に、65歳からの人生をより豊かにすることについて考えデザインできるように支えていくことが重要ではないかと思うのです。人生の早い段階から備えるためには情報の提供や教育機会も必要でしょう。国民一人ひとりの意識に、そのことがのぼるように、ハッピープラチナ運動を進めたいと考えています。今年は2015年ですから、5年後のオリパライヤーは国民運動の折り返し地点。2025年にはハッピープラチナ社会が実現しているという目標を持っています。

高齢者の知識・ノウハウの受け手が支え手にもなる

金子　地域の中でもいろいろできることがあると思いますが、さまざまな世代が交流していくきっかけは、どのように作っていくのでしょうか。

たかがい　それは各分野・地域ごとに、そこにいるみんなが考える問題です。みんなが主体者になるのですから。たとえば、各地域のお祭りや踊り、歌などには、その地域固有の意味が込められています。地域で育まれた歴史や文化・伝統を継承していけるのは、外部から呼ばれた有識者とは限りません。これからはその役割を一層積極的に、高齢者に担ってもらいたいと思います。学校の社会科の授業と連携するのもいいでしょう。教える高齢者は、お金をもらうよりも、自分の知識やノウハウを他の人に伝えることが嬉しい、ハッピーだと思うかもしれません。教わる側は、やがて地域の支え手として文化を継承していくことが期待されます。

確かに、若い人よりも体力は衰え、身体が不自由な人もいます。一日中お店に立ったり、荷物の上げ下ろしは難しいでしょう。でも、今ではインターネット上にお店を出せます。田舎の味や隠れた名産品を全国相手に販売できます。実際に大きな売り上げをあげている高齢者の例もあります。

浅田　高齢者はICTが苦手なものだとステレオタイプ的に考えていました。高齢者のもっているノウハウを引き出すためにICTを活用するというのは、新鮮な驚きです。

たかがい　たとえば「農作業の軽労化」とありますが、パッと見るとロボットのこと?と思いますよね。もちろんロボット開発も面白いのですが、それだけでなく、農ガールの活躍も考えられます。今まで縁もゆかりもなかった若い女の子がネットに掲載された新鮮なイチゴ農園の写真を見て、「いちごつくってみたーい」と農村にやってきたりします。でも、彼女たちにはイチゴ作りのノウハウはないですから、お年寄りが農業の知識・技術を伝授し、実際の農作業は若い子がする。そういうことも考えられます。そんな若者がどこかにいるかもしれません。そのマッチングを支援するということも考えられますよね。

ここに書かれていることは、単なる議論の羅列ではなく、参画している省庁では実際に予算を立て、事業化しようとしています。たとえば「高齢者に

よる環境保全、文化や伝統の継承等の取組促進」は、総務省、文部科学省、環境省が予算要求しようとしています。住宅整備については、国交省が中心となって高齢者の住居をデザインしていきました。一行一行の背景には、関係省庁の方々をはじめ、様々な専門性をもった人たちの知恵とアイディア、そして将来への希望が詰まっています。

超高齢社会の中で看護がはたす役割は？

金子　高齢社会というテーマでありながら、高齢者だけではなく、若年層もふくめたみんなの問題なんですね。

たかがい　日本はこれから人口が減少し、生産年齢人口が激減します。そういった中で、高齢者が過ごしやすい社会をつくるということは国民全体の課題です。高齢者イコール要介護か否かだけではなくて、それぞれの世代が高齢になるまでの時間を使って備えようという発想が出たのは、とても意義のあることでした。

浅田　たかがい先生のお話を聞いていて、看護職が対象とする高齢者は、病院に来る方々だけではないなと思いました。病棟や訪問看護だけではなくて、いろいろな看護の働き方があって、さまざまな形で高齢者を支援していくことを考えなければならないと思いました。

たかがい　私たち看護職の臨床は、入院病床に限りませんよね。いろいろなベッドサイドがあります。今後は、様々な場面で看護を展開していかなければならなくなるし、看護職もそういう発想をもたないといけないと思います。

金子　病院で勤務していても、その患者さんが退院して地域に戻っていった時のことをイメージしてケアする必要がありますね。

たかがい　看護職の場合、高齢者というと、お世話してあげる人という見方になりがちです。自分たちだって、いつかはお手伝いがないと働けなくなるかもしれません。これからの超高齢社会で労働力が激減して一番困るのは、誰かの助けを必要とする人たちです。子どもたちや病人など、社会的弱者です。労働力が激減する中で、手助けを必要とする人の割合は増えていきます。介護や医療の担い手を守り、サービスの質を上げる制度設計が必要です。そういう中で看護職は何をしなければならないのか。

今の働き方に固執していると、次の時代を守ることができません。生涯にわたって自分たちがどう生き、看護職としてどのように活躍していくかを考えられるようになりたいですね。

専門職として働くということ

たかがい　看護職の免許は一生ものですが、多くの職場では定年が設けられているため、生涯にわたるキャリアプランを考えにくい環境にあります。60歳でいったん退職し、65歳まで再雇用というかたちですと、賃金も低くなります。これからは、効果的なキャリアの積み上げができるよう、看護職の生涯を見据えた新たな働き方モデルを提案していかなければなりません。被用者として働き続けるか、経営者になるか、経験を活かした別の働き方を選ぶのか。看護職の未来を指向できるような参考例を出していけたらと思っています。

お二人のように大学院で勉強されている方は、自分の人生設計だけでなく、次の世代の人たちが専門性を活かせる環境をどうつくるかを考える役割を担っていると思います。

金子　自分が75歳になったとき、自分は何をしていて、世の中はどのようになっているのか。いろいろ見聞を広めながら、イメージすることが大切ですね。

たかがい　そうですね。看護連盟には、たくさんの先輩方がいます。75歳を過ぎてもお元気で活躍されている方もいらっしゃれば、病や障害で苦しんでいる方もいます。しかし、たとえ入院なさっていたとしても、その方ご自身の経験を語り伝えることはできるはずですね。それぞれご自分で生き方を切り拓いていらっしゃって、今がある。その方たちから学ぶ姿勢が大切だと思います。

浅田・金子　どうもありがとうございました。